　毎度々々のことながら、この一言は男にとってもつらいものなのだ。
「もう行かなきゃ」
「お急ぎね」
　お決まりの問答だ。夜の物から半身を起こした行隆は、隣で横になっている彩子に目を落とし、次いで御簾越しに庭を眺めた。まもなく夜明けだ。
「下級貴族はつらいんだ、なんて今更のように言わせるなよ。もうすぐ朝廷のニワトリも鳴き出す頃だし…」
「あら、ずいぶんと早いニワトリなのね。孟嘗君の仕業かしら？」
　彩子との奴、今朝はやけにつっかかるな、と思いつつ少し拗ねてみせる彩子が愛らしかった。しかしこれ以上むしかえすと面倒だ。行隆は口元を押さえていた扇を彩子の枕元に置くと、精一杯のさわやかな作り笑顔で彩子唇を軽く塞ぎ、少しは足早にそこを去った。

　当時、平安王朝期の貴族階級は通い婚であった。結婚式等はない。男は恋人である女の家に通う。最初は夜這い程度の密会が普通で、行隆と彩子がまさにこの状態である。そして通う度数が頻繁になり、互いに経済的に助け合うようになると、世間でも夫婦と認めるようだある。であるから別居のまま夫婦であり、また一夫多妻制のような乱婚色濃厚なことも、決して不自然ではなかった。
　行隆は彩子の住む家な山花殿をあとにした。空はまだまだ暗いが、初夏の霧が青い光を帯びて、何とも幻想的であった。小舎人童を一人供にし、二条大路を西へ歩いた。自分の屋敷に戻り、朝廷に出仕するためである。
　すると向こうからも小舎人童を一人連れた男が歩いてくる。霧でよくは見えないが、そのいでたちからして貴族らしい。となるとその男も行隆と同じ状況なのだろう。ところが、
「おや？　」
　同時に気づいた。二人は顔見知りであった。
「これは実彰殿。尊も後朝で？　」
　行隆が決まり悪そうに笑いながら言うと、相手もバツ悪そうに笑いながら答えた。
「これは行隆殿。左様でお互い、寝不足ですかな」
　実彰はテレ隠しのため扇を広げ、顔を半分隠して会釈し、すれ違った。行隆もそうしようと思ったが、扇がなかった。
（いけね。彩子の部屋に置いてきちまった…）
　後朝とは夜這いの翌朝、要するにコトが済んだ後の朝である。そしてこの後朝に男が女の許に恋歌を持参するか、小舎人童に届させるのが、当時の貴族社会における恋愛のモットーであった。

　実彰と別れた後、やがて左手に東三条殿の築地が見えてきた。東三条殿…大内裏が改築中のため、今は里内裏になっている。すなわち関白・道隆や中宮・定子が住んでいる屋敷である。そ

して中宮・定子に仕える女房・清原香子も、今はここにいるはずだ。
　香子は行隆の昔の恋人である。行隆にとっては貴族社会における初めての恋人であった。あの頃はお互いに半分まだ子供で…、なんてなつかしく思い出していたら、急に会いたくなった。顔が見たくなった。
　行隆は供の小舎人童を先に帰すと、単身東三条殿に忍び込んだ。そこは夜這い慣れした百戦錬磨の行隆。どうにでもなるのだった。

　御簾越しに香子の部屋を覗き込む。暗くてよくはわからないが、夜の物を頭からかぶって寝ているようだ。
　行隆は御簾と几帳の間から巧みに入った。香子の枕元は小物が乱雑に散らかっている。どうやら今しがたまで男がいたらしい。などと観察していたら、気配を感じたのか、寝ぼけ眼の香子がひょっこり顔を出した。目と目が合い、行隆は思わずニヤッとした。すると香子はモゾモゾと動き、また夜の物をかぶってしまった。香子は行隆を見て、
（あら、やだ。私まだ夢でも見ているのかしら？）
　と思ったが、どうやら現実とわかり、あきれたやら恥ずかしいやら…。しかしまぁ、そんなに悪い気はしなかった。
（他の女の所からの帰り道ね。ついついって感じで来たのかしら。それにしても…、男が帰った直後の女にも興味津々で、あきれちゃう。やだなぁ、丸見えだったんだ。まぁ、いっか。知らない仲じゃないし）
　そんなことを思いながら、香子はずいぶんわざとらしい狸寝入りを決め込んだ。お互いの心情は一寸した動作でもわかりあえる二人だ。こうなると行隆の方も、いっそういたずら心が増してくる。
「名残惜しい朝寝坊だな」
　そんなセリフを言いながら、行隆は香子の隣に腰を下ろし、その半身を夜の物ごとそっと抱き寄せた。すると香子も顔を出し、甘えるような笑顔を上目使いで、ようやく行隆を見た。
「朝霧よりもせっかちに帰っちゃう男が、割り切れなくて…」
　香子にこう言われると今の自分か、はたまた昔の自分に言われているような気がする。行隆はふと、香子の枕元に落ちている扇を見つけ、拾い上げた。
「男物だ。…なるほど、せっかちなのは確かだ」
　自分自身に言った。
「いいの、寄り道なんかして？　」
　からかうように、いたずらっぽく香子が言った。行隆は男物の扇を懐にしまい込むと、その手を香子の髪にまわした。
「早く帰って、女に後朝の和歌でも書いて出してやろうと思ったけど、そんな気、なくなっちゃったよ」
　香子はクスッと笑って答えた。
「早く帰って、出してあげればいいのに」
「…わかってねぇな」

「フフフ…あなたもね」
　知らぬ間に空が白々としている。それにつられて何気に庭を見たが、そこに男の気配を行隆は認めた。
（香子と寝ていた男だな。後朝の和歌を持って来たけど、俺に気づいて入りづらいわけだ。…香子の奴、まだ気付いていないな）
「ゆっくりしていく？　朝膳でも食べていけば？」
　こんな香子の気遣いも嬉しかったが、そうもいかない。
「いや、もう行くよ」
「えっ、どうして？」
「外にいるあいつ、待たせちゃ悪いからな」
「えっ？」
　香子はこちらを気にしている外の男にようやく気づいた。行隆と香子の二人は何とも言えず、顔を見合わせてほんの小さく笑った。
「外のあいつに伝えてくれ。扇は戦利品として貰って行く」
　行隆は反対側から香子の部屋を出た。

　行隆は急いで彩子の花山殿に戻った。香子と恋した頃を思い出し、たまには後朝の和歌を持参し、誠意を示そうと思ったからだ。ところが、
（おや？）
　行隆が庭から御簾越しに彩子の部屋を覗き込むと、妙な話声。どうやら彩子と男が寄り添って、話をしているらしい。
「何だこれ。男物の扇だよ。せっかちな奴だなぁ。昔、お前の許に通っていた頃の俺は、こんなじゃなかったよな」
　そんな男の声。しかもよくよく見ればその男、二条大路ですれ違った実彰ではないか。
　行隆はくるりと部屋に背を向けて、庭を眺めた。
「……」
　霧でかすんだ有明の月を見上げた。行隆は誰の物とも知れぬ扇を懐から取り出し、口元を押さえた。こみあげてくる苦笑いを、そっと隠すために。

## 注釈

用語解説
夜の物…寝具
孟嘗君…古代中国の人。ここでの意味は、ニワトリの鳴きまね名人にニセ声を出させて窮地を脱した故事に由来する。漢文で習ったやろ
小舎人童…「こどねりわらわ」と読む。貴族のお供をする十歳前後の少年。女の元に通う貴族は、これをお供にするのがオシャレだった…らしい
尊…「みこと」と読んで。意味はyou
恋歌…もちろん和歌ですよ
御簾…「みす」すだれ的なモノ。カーテン的役割
几帳…「きちょう」移動式カーテン。部屋の仕切りに使う。「きちょうめん」のきちょうですよ